

「県政タウンミーティング」会議録

テーマ 「全国一の数を誇る公民館を活かした多様な学びの創出」

日時 平成28年5月17日（火） 午後4時45分から6時15分まで

場所 阿智村中央公民館（阿智村）

目次

1	開会	P 2
2	趣旨説明	P 2
3	知事あいさつ	P 3
4	活動事例発表	P 6
	①伊賀良公民館の取組	P 6
	②飯田OIDE長姫高等学校の組	P 10
	③つながる福島 Jr ユースキャンプ in あち実行委員会の取組	P 16
5	意見交換	P 22
6	知事総括	P 29
7	閉会	P 33

【参加者】

県民 105人

長野県知事 阿部守一

進行役 飯田市公民館 副館長 木下巨一氏

活動事例発表者

①伊賀良公民館の取組

紹介者：館長 平田睦美氏

発表者：専門委員 北林省治氏

②飯田 OIDE 長姫高等学校の取組

紹介者：飯田市公民館 公民館主事 小島一人氏

発表者：教諭 浅井勝巳氏、生徒 鎌倉朋也氏

③つながる福島 Jr ユースキャンプ in あち実行委員会の取組

紹介者：阿智村中央公民館 公民館主事 大石真紀子氏

発表者：実行委員会 事務局長 金子智行氏

1 開 会

【広報県民課長 藤森茂晴】

それでは、皆様お待たせいたしました。本日は平日の夕刻にもかかわらず、大勢の方にお集まりいただきましてまことにありがとうございます。

ただいまから「県政タウンミーティング」を開催いたします。意見交換までの進行を務めます、私、長野県広報県民課長の藤森茂晴と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本日の県政タウンミーティングですが、全国一の公民館数を誇る長野県の中で、特に公民館を中心とした活動が活発な飯田・下伊那地域における活動事例を紹介していただき、公民館の果たしている役割について、皆様と考える機会にしたいと思っております。終了時刻は概ね6時25分までの予定で進めてまいります。

なお、本日の意見交換の内容ですけれども、お名前などの個人情報を除きまして、後日、県のホームページで公開させていただきますのでご承知おきください。

また、本日は報道機関の方が見えておりますけれども、大変恐縮ですが、参加者の皆様の中でカメラ、テレビカメラ等に映ることにちょっと支障があるという方、いらっしゃいましたら挙手をお願いいたします。よろしいですか。

それでは、CATVも入っておりますので、そういったところで映るということもあるようです。よろしくお願いいたします。

それから、お手元の封筒の中にアンケート用紙が入っております。タウンミーティングが終了した後で回収をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

本日の進行ですけれども、飯田市公民館の副館長でいらっしゃいます、木下巨一様をお願いしております。

木下様は、飯田市役所に入庁後、30歳で伊賀良公民館主事になられ、現在まで20年以上、公民館社会教育業務に従事されております。また2011年、平成23年には飯田市公民館の副館長をされております。

それでは、以降の進行を木下様にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

2 趣旨説明

【木下巨一氏】

どうも皆さん、こんばんは。ちょっと不思議な形の席のしつらいで、ちょっと緊張しております。ご紹介いただきました飯田市公民館の木下と申します。

最初に、本日のタウンミーティング、預けていただいた開催趣旨と進め方を私のほうからちょっと説明をいたします。

ちょうど今年が70年目、公民館ができるきっかけになった70年目の年になります。ご承知の方もいらっしゃると思うんですが、当時、文部省が公民館をつくりましょうという呼びかけをしまして、当時の社会教育課長の寺中作雄という方が呼びかけたんですけども、戦争によって荒廃した郷土を、そこに暮らしている住民の皆さんの力で復興していくための拠点として誕生したというのが、その70年前の話です。ですから、公民館というのは、そもそもそこに暮らしている住民の方たちが、自分たちの力でその地域をよくしていくための地域づくりの拠点として生まれたというふうに捉えております。

公民館は日本全国各地に生まれたんですけども、その中でも長野県というのは、他県と比べても桁違いにたくさんの公民館が設置されております。しかもこの飯田・下伊那というのは、最も公民館の活動が元気だというふうにいわれておる地域であります。

そういうことで、本日のタウンミーティングでは飯田市と、それからこの開催地の阿智村の3つの事例を紹介しながら、その公民館活動の主役は地域の住民の方たちです。主役の方の話と、その主役の方を黒子で支えている、今日は職員もちょっと表に出て、住民の方と職員の方に協力して発表してもらいます。

本日の3つの事例に共通していますのは、次の地域の担い手である次世代を育てようという、そんな取り組みで共通しております。そんなことで、地域づくりの拠点である公民館の新しい可能性についても考えてみることもできるといいなというふうに思います。それで、阿部知事からは、発表された事例にまたコメントをちょうだいする形で参加をいただく形かと思えます。

それでもう一つ、今日参加いただいた皆さんからも、ぜひ私もこんな話をしてみたいというそんな時間も用意しておりますので、ぜひお話をいただければと思います。

終わりの時間は、先ほどご紹介いただいたように、6時25分を終了めどといたしますのでご協力をお願いいたします。

それでは早速、タウンミーティングに入ってまいります。最初に阿部知事から少し、今日のタウンミーティングの期待を込めて、一言ちょうだいしたいと思います。よろしくをお願いします。

3 知事あいさつ

【長野県知事 阿部守一】

「皆さん、こんにちは」と、あそこで手話をやっていただいていますけれども、「皆さん」はこうやって、「こんにちは」というのはこうやってこうですよ。それ以上、私はまだ学べていないんですけども、タウンミーティング、今日はまずお集まりいただきましてありがとうございます。

何で手話をやったかということ、手話言語条例、新しく県としてつくりました。手話は、聴覚障がいの方にとっては基本的なコミュニケーションツールであります。人間が

人間として生きていく上で、一番大事なことはやっぱり人とつながること、人とコミュニケーションをとることです。そういう意味では、長野県として手話の普及をしていきたいというふうに思っていますので、ぜひご関心のある方は、これから県の保健福祉事務所でも手話講座をやっていきたいと思っていますので、ぜひまたお問い合わせをいただいて、あるいは、そんなに深くやる時間はないという方でも、「こんにちは」とか「おはよう」とか、「ありがとう」とか、それぐらいだけでも覚えていただくと、聴覚障がいの方たちにとっては大変な励みになりますので、ぜひちょっとこのこと、冒頭、申し上げておきたいと思います。

今日は県政タウンミーティングということで、まず大勢の皆様にお集まりをいただきまして、ありがとうございます。また木下さんにはファシリテーター、そして公民館活動をされている先ほどの住民の皆さん、そして黒子で普段支えていただいている職員の皆さんに、今日は事例発表していただくということになっています。

私は、コメントとさっき木下さんおっしゃっていただきましたけれども、あまり評論家みたいなコメントをするのは私は好きじゃないので、何か県知事として出てきたからには何か一緒にやりましょうとか、それは県の施策で取り入れましょうとか、あるいは県としてこういうことを公民館でやってくれませんかとか、何か具体的な動きをつくる、今日は場にできればありがたいというふうに思っています。

最初、木下さんにお話いただいたことに関連して、ちょっと2つお話したいと思えますけれども、1つは、先ほどおっしゃった地域づくりの拠点という形で、木下さんおっしゃっていただきました。私は、長野県は全国に誇るものがいっぱいある県だと思っています。もちろん世界に誇れる美しい山岳景観であったり、あるいは農家の皆さんが丹精込めてつくったおいしい果物、農作物であったり、いろいろな誇れるものがあるんですけれども、私は長野県の強みの基本にあるのは地域力だと思っています。地域力、地域の力。

何というか、例えば東京とか横浜みたいな大都市は、地域、元気だねと、地域、力があるよねという感じで一般的には見られがちですけれども、私は全くそんなことは思っていないですね。私は横浜で副市長をやっていましたけれども、横浜も、きらびやかな面もあるけれども課題は山ほどあるし、もっと言うと、例えば年中、電車が遅れています。ちょっと歯車が狂うと、東日本大震災の後の帰宅難民のことを思い出していただければすぐわかると思いますけれども、大都市はすごく強い地域に見えますけれども、私はすごく弱い地域だと思っています。ちょっと歯車が狂うだけで、全部、機能がまひしてしまうと。

あるいは、これは長野県の事例では「白馬の奇跡」といわれましたよね、一昨年の中城断層地震。震度6の地震で多数の倒壊家屋が出ました。だけど、あのとき地震で直接亡くなる方はゼロでした。それを白馬の奇跡と呼ぶ人たちがいますけれども、私はいろいろなところで奇跡ではないというふうに言っています。それはもう普段から地域

の人たちが支え合い、助け合って生きている地域だからこそ、ああいう地震が起きたときに、あそこの家はおばあちゃんがいたなと、あそこの家は夜はこの辺で寝ていたはずだなと、だからすぐ助けに行けたわけですね。これ都会だったら、隣に暮らしている人のこともよくわからない地域がいっぱいあるわけですから、まず誰がいないかということすらわからない地域がいっぱいあると思っています。

私たちの長野県は本当に地域のきずな、地域の支え合い、助け合いが全国の中でも極めて強い地域だと思っています。その地域力をこれからも維持して伸ばしていくということが、長野県をこれからも長野県たらしめていくことにつながると思いますし、その重要な核となるのが、私は今日のテーマである公民館だというふうに思っています。

長野県の公民館数は、2011年のデータで、ちょっと古いですがけれども、1,236館ということで、日本の約15,000館近くある公民館の数の中で、ダントツで公民館の数が多い県であります。この公民館をどう活かすかということが1つ、これから私たちが一緒に考えなければいけないテーマだというふうに思っています。

それからもう1点、ちょっと余計な話をするかもしれませんが、私は、長野県は教育県ではないというふうに県民の皆様方の多くが思い始めて久しく時代がたってきているなと思っています。でも私は、長野県は確かに昔のような寺子屋がいっぱいあって、あるいは小学校の就学率が高いというような昔の感覚の教育県、あるいは全国学力テストの点数が高い、そういう教育県ではない現状ではあると思っていますけれども、しかしながら、私は県民の皆さんの学ぶ意欲、学習意欲が高い県だというふうに思っています。

私は、例えば県内の図書館へ行って、高齢社会ですからお年寄りがいらっしゃるのはどこの地域でも同じだと思いますけれども、うちの県の図書館へ行くと、お年寄りの人たちも勉強していますよね、勉強。というのは、何か単にボートと本を読んでいるだけではなくて一生懸命学んでいる、メモしている、いかにも学んでいるという姿勢の方たちを多く見るのがうちの県だというふうに思っています。

私は、長野県、もう一回教育再生していきたいと思っていますし、単なる教育再生ということだけではなくて、これからは生涯学び続けることができる学習県にしていきたいと、学習県。教育県というのは、どちらかというと、何か上から目線で教える県だよという感じですがけれども、学習県というのはやっぱり一人一人が主体になって学んでいく、そうした環境づくりを行政も手伝っていく、一人一人が学ぶ強い意志を持ち続ける、そうした県にしていきたいというふうに思っています。

そういう意味では、これ社会教育の拠点としての公民館の位置づけもあるわけでありますので、ぜひ、これ全然、木下さんと何も打ち合わせしていないんですけれども、ぜひ「学習県長野」をつくる上では、公民館、どういう役割が果たせるのかなということも、ぜひ私としては一緒に考えていただきたいというふうに思っています。

ちょっと遅れて来たことをまずお詫び申し上げなければいけません、遅れて来てあ

まり長話してはいけませんのでこの程度にいたしますけれども、あとは皆さんと一緒に、前向きな意見交換、対話をしていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。今日はありがとうございます。

4 活動事例発表

【木下巨一氏】

ありがとうございました。それこそ、今日の話のもうまとめになってしまいそうな一言をいただきました。今日の話は多分、学習の話で、その学習がつながって、それが地域の力になっていくという、そんなところが多分、落としどころになるかなと期待しております。

それでは早速ですが、3つの事例をそれぞれ発表してもらいます。一番最初、登壇していただいておりますけれども、「伊賀良を学ぼう」の取組についてのまず発表をしてもらいます。

飯田市の伊賀良地区の、今日は公民館長の平田睦美さんと、「伊賀良を学ぼう」の中心のメンバーである、地域の立場で北林省治さんにお話をさせていただきます。ではよろしく申し上げます。

【平田睦美氏】

皆様、こんにちは。平田睦美と申します。今日発表していただく北林省治さんは、この学級生、講座生のお一人で、広報部副部長としてもご活躍いただいております。

現在、地区の人口は14,600人余がずっと続き、小学校の児童数も多いときは1,013人、今年は935人となったものの、県下では2番目の大規模校となり、多くの方々が居住されています。ちなみに、2012年度の高齢化率は約26%で、子育て世代の多くを占めている地域でもございます。

このように地域の激変や価値観、生活様式が多様化する中、歴史と伝統ある公民館活動も不易流行の必要性に迫られておまして、就任させていただいた1年目の私にとっては、年間事業を無事にこなさせていただきほっとしていた矢先、突然「館長、公民館はこのままでいいんですか」と、真剣な顔をして駆けつけてくれたのが北林さんでした。

8年前のことです。3年目の北林さんには1年目の私はないませんでした。わからないですからすごい衝撃を受けましたが、穏やかではありません。でも、それから半日ずっと二人で特別会議室で議論をいたしまして、その内容が公民館活動の課題として抜粋させていただいた、左側の画面でございます。時間もありますので、その後の公民館の姿勢という右側をごらんいただきたいと思います。

反省を踏まえまして、住民自らが参画して活動の目的を明確化し、集う・学ぶ・実践するを考えていく。2つ目、自由な発想に基づいた活動をということで、個々の自由な

発想を素早く活動にとり入れていくこと、それが「伊賀良を学ぼう」の学級講座でございます。ここからは北林さんにお話をいただきます。

【北林省治氏】

皆さん、こんにちは。本日はよろしくお願いたします。

今、館長からお話がありましたけれども、私はその当時、広報部の一部員だったんですが、やっぱり、飯田市のまちづくりという体制になって、公民館の活動が、それ以前と比べると受身的な感じになってきたのではないかという思いを持っておりましたので、いろいろ館長とその当時お話をして、もっと違う活動ができるのではないかというところから、今回の「伊賀良を学ぼう」というものが始まりました。

最初は何をやるのか、何も当時の主事さんは言ってくれません。会議をするにしても、事前会議、予備会議というものから始まりまして、出てきたレジュメには全く何も書いてありません、真っ白です。そこで主事さんが言うには、皆さんは「伊賀良を学ぼう」で何が学びたいですか、というところから始まったのがこの活動でした。

最初に、その当時の私の心境の変化というか、今までこの5年間、その活動に携わってきた気持ちの変化というものを挙げてみましたけれども、とにかく最初は広報部員として公民館講座をどのようにやっているのかということで、取材をしたいという思いからとにかく入ってやってみようということで、ほんの片足を突っ込んだ程度の気持ちでやっていたんですけども、やっていくうちにどんどんどんどん引きずり込まれていきまして、最初、色が変わっている黄色い部分ですね。新たに公民館が取り入れた部分なんですけども、予備会議、目標決定、内容決定、この部分は今まで館長と主事さんがほとんどやっていたんですけども、この部分を参加していただいた方にやっていただきたいということで決まっていたんですけども、どうやら参加した方はみんな歴史が好きなので、歴史になりそうだということで私は猛反対したんですけども、どうしても歴史を学びたいという方が多かったんです。それで、いろいろ反対したんですけども、地域の歴史を知らずして未来を語るなどと言って怒られたことがあります。それだったらわかったと、もっとわかりやすい形でやってもらえるんだったら僕は積極的に参加しますということで、できるだけ子どもにもわかる内容でということをお願いをしていきました。

そんなことで、自分も企画にかかわったことで、本当に片足だけ入れるつもりでやっていたのが、知らず知らずのうちに両足が入ってしまったと、今ではここでこんな発表をするはめになってしまったんですけども。本当に年齢の違う方たちと同じ話題で議論ができるという、これ楽しいんです、結構。中には80歳近い方と、普段ですと世間話もなかなかつながらないんですけども、その方とは先生と弟子みたいな形でいろいろ話ができるし、10代ぐらい上の方、団塊の世代といわれる方なんですけれども、その方たちとも普通に、敬語でなく普通の言葉で話ができる立場になって本当におもしろくな

ったという、そんな中で地域の歴史を学んでいくと、この文化は誰かに伝えないともったいないんじゃないのという、そういう心境の変化になっていったというのがあります。

それで、その会議なんですけれども、最初に言いましたけれども、公民館講座で学びたい方を中心に、当時の公民館員、30名ほどが集まっていろいろ話し合ったんですけれども、本当に参加者は白紙のレジュメを見て、「館長、何をやるんだ」という話になって、そうしたら館長は「皆さんは何が学びたいですか」ということで、そこでやっとこの会議の目的がわかったという、本当に最初の30分は何をやるのかもそもそもぞしっておったんで、そのときの主事さんは本当に困ったと言っていました。こんなやり方でやって大丈夫かどうかというのがあったみたいなんですけれども、やっぱり企画から地域住民の方が一緒に携わるということのおもしろさ、そこから発展していく意外性というのが結構あったものですから、そんな中で、誰にどんなことをどんな程度ということも、それぞれ主事さんは一切かかわらずに、参加した皆さんが決めていったところですよ。

それでどんなことを、多くの知っている小学校の校歌を活用ということで、結構、校歌の歌詞には地元の自然や文化の歌詞がたくさん入っています。それを使うことによって最終的には小学校の高学年の方、子どもたちにもわかる内容にしていっていいのかなということで、話が事前会議でまとまったということですね。

それで校歌をとり上げた理由は地域の方、その地域の小学校を卒業した方は、もう昭和2年から制定されているので、ほぼ全員の方が知っているということです。歌詞には伊賀良の文化がとり上げられていると。ちなみに私は伊賀良出身ではありません。伊賀良に来て30年弱になりますけれども、私の家族で伊賀良小学校卒業でないのは私と私の義理のお父さんだけなんですけれども、あと、お母さんと私の奥さんと子どもたちはみんな伊賀良小学校で、伊賀良小学校の話は何かうちの中ではできるという環境でした。小学校の校歌をとり上げたということで、それだったら、小学校へ行ってこの話を伝えなければもったいないということで、みんなの目標が少し高くなったという、その小学校で発表するという目標がまた一つ、つけ加えられたところがあります。

それでその活動の主なテーマなんですけれども、この赤いところ、「新しく住み始めた方ももっと伊賀良を知り、もっと伊賀良を好きになるためにこの講座を実施します」というところで、これが一貫した現在までの目標になっています。

これはチラシに書いた文章なんですけれども、右上の「歴史は苦手でも」とありますけれども、あれは私が書いたところです。ですので、できるだけ私みたいな方がたくさん参加してくれたらいいなと思ったんですけれども、やっぱり若い人は若干少なかったです。私より若い40代の方も5～6人いらっしゃいましたし、全体、平均で大体15人から20人ぐらいの講座生が毎回来ておられました。そのうち3人ぐらいですか、40代、50代が5～6人、それで60代以上が半分以上という形だったと思います。

これが最初に出したチラシなんですけれども、右上が伊賀良の校歌ということで、校歌の中でも赤い字のところを重点的に現地学習、講座という形で学んでいきました。

これまでの活動の経緯なんですけど、伊賀良の魅力再発見ということで、校歌を活用し、座学と現地学習で参加者の理解を深めると、これを現在まで57回ほど実施しております。学習したことを参加者がまとめ、発表ということで、それぞれ違う方が広報に学習したことを書いていただくということをしてしております。これは広報の私の仕事なんですけれども、私が一人で書いてももったいないということで、参加して学んだことを広報にレポートとして書くと。こうすることによって、参加した方、よりその理解を深めることができるのではないかと考えています。

ここにありますがけれども、参加者が自分の言葉で子どもたちに伝えるというところ、これが1年目ですね。それ以降は校歌以外でも地元の歴史建造物やお祭りや文化・井水・一級河川などについて、座学と現地学習、これ2つセットになっておりますが、これを繰り返して文化祭で発表したり、小学校の校歌につけ加えて子どもたちに発表したりしています。それで今年の3月になりますけれども、この4年間、勉強してきたことを一つのマップとしてこういう形で、表はマップ、裏はそれぞれ7つの分類に分けて説明したものができました。こんな形で現在も活動を続けています。

小学校の校歌を説明したときの子どもたちの感想ですけれども、特に左の真ん中にありますけれども、春・秋・夏・冬の伊賀良の様子を校歌にあらわしてあること、歴史やキーワードが隠されていることなどに驚いたと。伊賀良のこと、中村のことをもっと知りたいです。伊賀良ってすごいんだなというような感想もいただいております。

これは公民館の文化祭で手づくりの展示物をつくったときなんですけれども、上が文化祭の様子なんですけど、横6メートル縦3メートルで行ったところの写真とその説明ということで、これを展示したところ、小学校の校長先生が「これはいい」ということで、その後、小学校の会議室の壁に現在も張られております。これが今年でき上がったマップの表と裏の状況なんですけれども、こんな感じで作らせていただきました。今後の展開としては、伊賀良地区に文化財をということで、今まで学んできたものの価値を高めるということで、いろいろ資料を作成して文化財指定へのアプローチをしていこうということです。

2番目にふるさと教材の作成、マップよりももう少し詳しいものを今後つくっていきこうということで、また5年ぐらいの計画で冊子などをつくっていききたいと言っています。私はこの2つは遠慮したいんですけれども、特に3つ目、次世代へつなげるということで、こちらのほうに私は重点を置きたいと思っております。結構、子どもたちの前で発表すると、その反応が楽しいんですね。その反応を見ながら、自分もまたもうちょっとここは詳しく学ぼうとかという思いもあります。

これらの活動をしてきて、やっぱり公民館には、目的意識というものをはっきり持たないと誰もついてきてくれないんだなという感じですね。それと企画力、誰が企画する

かによっても違いますけれども、みんなで企画するということができれば、本当にその先、どんどん広がっていく。あのときこうだったから、次はこうしないかという話が必要出るんですね。そうすると、最初、私は低いハードルに抑えたかったんですけども、気がつけば、子どもの前で発表するという高いハードルを立ててしまったものですから、せざるを得なくなってしまうと、そういう楽しみ、楽しさというのが結構ありました。

それで、こういう活動を5年もやってきたので、ある程度、定着してきたと思うんですけども、公民館の次の新たな活動が今後どうなるかというところで注目されるのではないかと思うので、また新たな活動にチャレンジしていけたらいいなと思っています。

委員としては、歴史よりリニア時代への危機感を持って、将来の地域を考える場ということで、多くの子どもたちとその時代、どういう地域になっていったらいいかなというような夢を語る場がもっとほしいなというところがあります。

私からは以上であります。ありがとうございました。

【平田睦美氏】

このように住民の皆さんが主役になり、想定外の発想や工夫もとり入れてよいものにつくり上げていく、学級講座の学びの楽しさ、達成感は大きな感動を分かち合うことでさらに発展していきそうです。

まさに大人の学びと子どもの育ちをつなげる、地域と学校の連携の取組を通して、お互いが育ち合えるように取り組み続けていきたいと思います。ありがとうございました。

【木下巨一氏】

ありがとうございました。とても密度の濃い発表なので、少し時間が厳しかったかなと思いますけれども、まず「伊賀良を学ぼう」の話でした。

今日は最初に続けて3つの事例のお話をしますので、この後、今度は飯田O I D E長姫高校で取り組んでいる「地域人教育」の話を、地域人教育を中心に取り組んでいる浅井勝巳先生、それから地域人教育、3年間で学んだ商業課3年の鎌倉朋也君、それからこの取り組みを公民館のほうでお手伝いしている、公民館主事の小島一人君の3人から話をしてもらいたいと思います。

それではよろしく願います。

【浅井勝巳氏】

皆さん、こんばんは。飯田O I D E長姫高校の商業科の職員をしております浅井と申します。よろしく願います。今日はこっちにいるのが生徒です。あと、今、公民館と一緒にやっている飯田市公民館の小島さんです。よろしく願います。

では今回のタイトル、地域をフィールドにした教育活動で、地域人教育の事例について発表させていただきます。

地域人教育、「何だそれ」というのがあると思うんですけども、簡単にいうと、地域人教育という教育をやるこんな生徒ができますというので、最初生徒の、でき上がった生徒の事例を聞いてください。

【鎌倉朋也氏】

はじめまして。長姫高校3年の商業科、鎌倉朋也といいます。お願いします。

今、長姫高校で「sturdy egg」という地域の団体があります。この説明をしますと、理念としては、ちょっと何か堅苦しい言葉なんですけれども、「第二の地方公共団体として高校生が主体の楽しいまちづくり」ということで、高校生の考える、とにかくやっぱり楽しいことをしないと、まちづくりというのは続かないのかなというところで始まった団体です。

これが阿智の昼神温泉の朝市で販売実習をやっている様子です。今月の5月29日の日曜日にも販売実習させていただく予定になっているので、見に来れる方はぜひ来ていただけたらと思います。

ほかにも遠山郷の活動だったり、あと高齢者向けのパソコン教室だったりなどをやっているんですけど、その中で僕がやっているのは、この「古家と家守のマッチング事業」というものになります。古家というのは、古い家のことで使い手がなく、長年空き家となっている建物のことです。家守（やもり）というのが、その古家を使う人のことを家守り（いえもり）ということで、家守と呼んでいます。

今、飯田市の空き家状況なんですけど、空き家が6,000件近く、空き家率13.8%で、全国平均よりも少し高い位置にあるというのを知りました。で、その空き家、古家というのと新しいアイデアでその空き家を活用する家守、これをマッチングさせる事業ができたらなと考えて始めました。

その中で、高校生だけだとお金もないし知識や経験もないので、その地域の同じようなそういう考えの企業さんと会えたので、デザイン会社、リフォーム業者の2社と一緒にやらせてもらっています。

それで、その「つなぐ」というグループ、団体でやっているんですけども、「つなぐハウス事業」と「そだてる事業」の二つの事業を考えています。まず一つが、「つなぐハウス事業」です。一軒の空き家を利用して、自分たちの手で古家をリノベーションして活用する。そこでは、僕、もともとゲストハウスというのを去年知って、すごいいいところだなと思ったので始めたいと思ったのがあって、もう一つ、シェアハウスというものも若者の間ではやっているような、一緒に住んでいる共同アパートのようなものです。またそこではギャラリーだったりリサイクルショップなど、いろいろ高校生がイベントをやったり話し合いとかをやったりして、人と人とをつなぐ場所になったらいいな

というのを考えています。

今年、空き家を活用、これが桜咲造（さくらさくぞう）という建物になっているんですけど、ここは空き家を活用して今年完成した建物です。1個目です。

中はこんな感じで、玄関だったり、あと和室と洋室とかがあって、とりあえずつながりの場をつくりたいということで始めました。

これは初めて僕が中に入ったときの写真なんですけれども、とにかくもう築54年で床も抜けていたりとか、すごいひどい状況だったところがあって、ここは結構広い建物で、平屋なんですけれども床面積は30坪というところで、こんな感じでみんなで掃除をしたり、ごみも出て、床を、天井をぶち抜いたりしてリノベーションしていきました。

ここには家守として住民がいます。嶋村駿吾さん18才、今年から市役所の職員になっています。僕の1個上の先輩です。去年の県政タウンミーティングでお話していたか、参加していた方です。

1個目、その建物ができて、1個目、大学生と企画をやらせていただきました。「南信州帰省鈍行」ということで、お練り祭りが今年あったので、その時期に大学生が、飯田出身の大学生が帰ってくる。それをおもてなしするという、高校生がおもてなしするという、その場で桜咲造を使いました。料理をつくったり掃除して待っていて、いろいろな交流会をやって、最終的には結構集まっていたいて、社会人の方もいたりして、すごいいい感じの会になりました。

ゲストハウスをやりたいということだったんですけど、やっぱり空き家ということで、何か権利の面とかであまり許可がおりないというところで、今はシェアスペースということで活動しています。今、考えているのは、これからコワーキングスペースみたいにできたらいいなというところで、2時間500円とか、そういうような感じで、会議、ミーティングスペースとかで使えたらなと思っています。で、やっぱりゲストハウスもやりたいので、今は目標としてゲストハウスをやるというのが目標です。

そんなつなぐハウスをやっていくうちに、知識とか人脈とか経験を得て、そして2つ目の「そだてる事業」に入っていきたいと思います。

そだてる事業というのは小規模事業者を、アイデアとかすごいいいことを考えている人はいるんですけども、お金や場所がなく事業が始められない、建物のリノベーションに不安があるなどといった小規模事業者を対象に、その空き家がいっぱいあるので、空き家と小規模事業者をつなげる、マッチングさせる事業を考えています。これ自分が空き家を使ってリノベーションしてみて、やっぱりお金がすごいかかったりして、それは企業に出してもらったんですけど。

やっぱりそういうつなぐ場所、何か建物がほしいといっても、やっぱり不動産屋さんとかとつながる場所がないということで、やっぱりそういうつなぐ場所をまずつくりたいということで、つなぐハウスがあって、そこからつながって、小規模事業者が事業をするというのがそだてる事業です。

高校生もやっぱりかかわって、企業の方もサポートして、このつなぐハウス事業とそだてる事業、2つやることによって古家を、空き家をすごい1軒だけじゃなくて、たくさん使える。そしてまた事業の収益にもつながるということで、この2つを連動してやっていきたいと考えています。

また小規模事業、カフェだったり、あとお花屋さんとか、何か好きなことをやってもらうんですけども、やっぱりそういうところで古家という共通項があることで、やっぱりその町が一体感があって、見る雰囲気とかが一つになるのではないかなと考えています。

その空き家を使った事業、これ広島県の尾道市のプロジェクトなんですけど、やっぱりこういうところで成功事例もありますので、こういうところを参考にしながらやっていきたいなと思っています。

ゲストハウスというのは、飯田市内でゲストハウスを運営している会社があるんですけど、一緒に協力してもらっている会社でやっていたところ、2カ月で15組、10カ国以上の外国人が訪れてくださったということで、ニーズがあると感じました。

そして長野県日本一起業しやすい県にということで、この県政タウンミーティングの場でこんなことを言えるとすごい何か、何だろう、何かこんなことをしていますけれども、やっぱりそういうところもあって、これから追い風が吹いてくるんじゃないかなと思っています。先ほども言いましたが、ニーズと合致すると考えてこの活動を行っております。

以上で、この活動の今の時点ですが、活動報告の発表を終わりにさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

【浅井勝巳氏】

今、生徒のほうから発表があったんですけども、何で彼がこうなったのかというところが、この後の地域人教育の話なんですけれども。

地域人教育、彼の今の事例のお話を見てもらうとわかるとおり、地域に出ています。「地域にある地域の教育力を使って地域で学ぶ」ということをコンセプトに地域人教育という学習プログラムは行われています。簡単にいうと、彼らにとって、本校にとって町中が教室です。地域に出て行くと必ず人が寄ってきます。「何しているの」と結構聞かれます。そうすると、いろいろなアドバイスをもらえます。これこそまさに地域にある教育力だと私は思っております。

これを始めたきっかけ、2011年から実は本校ではリヤカーに野菜を載せた引き売りをやっております。リヤカー行商というので、買い物弱者のためにというのをやっております。そのときに、最初のきっかけづくりとして、私はIターンで長野県に来ていますので、飯田に来て全然、誰も知らないし、よくわからない。地域のことをよくわからないので困ったというときに、最初に電話をかけたのが公民館のところに紹介いた

いて、公民館からいろいろな方を紹介していただいたというところです。

一応、活動をしっかりとできるように、本校では飯田市と本校と、あと地域系の教育に強い松本大学と3者で協定を結んで、いろいろなノウハウをもらっています。今やっている地域をフィールドに活動したのが、彼個人でやっているわけではなくて学校全体で、学校全体というか商業科全体でやっています。授業で取り組むというところがこの地域人教育のプログラムのポイントです。

先ほどの彼みたいな、割と「sturdy egg」の子たちというのは、みんながみんなこんな生徒ばかりだとちょっと学校は落ちつかないので、それはそれで問題なので、ほとんど、これは特別です。こういう元気のいい生徒が地域にどんどん出て行ったときに、もう学校ではもう手に負えないんですよね。地域の方とどんどんつながるときに、やっぱりそうなってくると、かなりもう社会教育の領域になってくるのかなと。そのときに公民館であったり、いろいろ地域の人をご紹介していただいて、その方と直接やっていく、そこで子どもたちが育っていく。そういう人たちが、何かやりますと手を挙げたときに、そこに、何かおもしろそうだと追随できるような人たちを学校のプログラムでどんどん育てていく。つまりグイッと、グイグイやっていくリーダーシップを発揮する生徒はある程度、学校で育てておいて、その子たちはもう外に出して行って社会のほうで育ててもらって、学校のほうでは、何かやりますというリーダーシップをとった子に後ろに追随していける人、何だこいつと冷やかな目で見ない、傍観者ではない人たちを育てるのが地域人教育かなと思っています。

地域人教育、これ生徒がつくったやつですけども、生徒たちは自分たちはパイオニアの革新者でありながらフォロワーで、誰かがやることは手伝うという、そんな理念でやっております。

地域人教育をやると、生徒も職員も地域にどんだんなじんで溶け込んでいきます。これが象徴的な写真です。いろいろな人とかがわっています。ここに紛れているのがうちの職員です。

ではこの後、では公民館のほうで最後、まとめをお願いします。

【小島一人氏】

こんにち。飯田市公民館の小島です。よろしくお願いします。

地域人教育は、長姫の商業科と飯田市の公民館が一緒になって取り組んでいる商業科の事業なんですけれども、今、先生たち、鎌倉君の話なんかでも出てきましたけれども、地域人教育で学校側が何というふうに出ているかという、この教育を通して自ら考えて行動する、できる人材、そういう力をつけていくと、それが地域人教育の狙いになっています。

何でこんなところに公民館がかかわっているのかという話なんですけれども、私は特にスライドを用意していませんので、こちらを見てもらえればなんですけれども、今、

鎌倉君が紹介したようなああいう動きというのが、結局は何をやっているのかというと、地域の中で困っている人とか、地域の中にあるニーズとか課題というものをくみ取っている。あとは、そういうのをいろいろな人たちを協力してやっている。そして新しい価値観、新しい考え方を生み出していつて何か事業につなげていつている、そういう動きだったと思います。

これというのは、実は公民館的に考えると地域の人たち、例えば先ほどの北林さんもそうですけれども、地域の人たちがずっとやってきていることと、結局、一緒のことなんじゃないかなというふうに思っています。この地域にはそういう生活の中で課題やニーズをちゃんと把握して、みんなで協力をして解決してくるということをやってきた人たちが、要はカッコいい、そういう大人が大勢いると、この地域にはそういうたちがあふれているんだということを、公民館活動をやっている中で、私は職員としてですけれども、大勢、会ってきました。この話をしていると長くなるので、ちょっと割愛しますけれども。

要はそういう地域のかっこいい人たちと、こういった高校の授業で高校生たちが会う、それで一緒に地域の人たちを活動をしていく、その中で、地域の人たちが自分たちのやっている姿を高校生に見せていき、そういうカッコいい大人に会ったときに、高校生の中でこれはおもしろいかもとか、こういうふうになりたいなとか、こういうことが大事なんだろうということが伝わっていくと、そんな教育、教育というか学校教育の中に社会教育的な要素を入れていきたいなと、そういうところが地域人教育の狙いであります。これは地域にとっても自分たちの活動の振り返りとか、あとは高校生に出る自分たちのあり方、高校生にどういう姿を見せていくべきなんだろうという大人としての自分自身への問いかけだとか、そういうことにつながってきます。

そういったことを通して、公民館としてはこの長姫の商業科と一緒にやらせていただくことで、高校生たちが力をつけていくということはもちろんなんですけれども、実は地域の人たちがみんなで高校生も一緒に育てていつてしまおうと。地域全体で高校生を育てる、そんな雰囲気をつくっていけるような、そんな地域になっていけば、この先の何が起こるか分からない時代も、今の時代もつくっていつている人たちの思いをきっちり次の世代にも伝えることができるのではないかと、そんな思いでこの取組をしています。

【浅井勝巳氏】

すみません、少し時間オーバーしましたが、以上で報告を終わります。ありがとうございました。

【木下巨一氏】

ありがとうございました。あとでフロアからの発言もちょうだいする予定ですけれども

も、実はリヤカー商店のきっかけになったときというのは、熊谷村長も実は会議所の職員と一緒にやっていただいた仲間ですので、ちょっとまた後で、一言言ってもらおうかなと思っています。

それでは3つ目の発表、だんだん押しておりますけれども、今度は地元阿智村になります。「つながる福島Jrユースキャンプinあち」実行委員会の事務局長を務めておられる金子智行さんと、それを公民館側で支えている阿智村中央公民館の大石真紀子さん、お二人から話をいただきます。では、よろしくお願いします。

【大石真紀子氏】

皆さん、こんばんは。阿智村公民館の大石と申します。今日は「つながる福島Jrユースキャンプinあち」の取組について、このキャンプを実施している、実行委員会の代表である金子さんと一緒にお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

まず最初にキャンプの概要について簡単にお話いたします。2014年、2015年夏休みに、福島県伊達市の中学生30人を阿智村に招いてのキャンプを実施しています。主催をしていますのはこの実行委員会になります。実行委員会のメンバーというのは、阿智村民の方を中心にした完全に有志で集まっている皆さんです。ここに公民館も加わる形で実施をしています。

場所としては、旧浪合中学校という閉校になった学校を利用して実施をします。キャンプ期間中には非常に多くの方にかかわっていただいております。会場準備ですとか食事づくりなど、そういったところで期間中に約70の方にかかわっていただいております。また高校生ですとか若手社会人の方にも参加をいただいております。グループリーダーという形で、中学生とともにこのキャンプを楽しむという形で参加をいただいております。

続いて、こうした取組がなぜ始まったかというところを少しお話します。そもそもの発端は2011年に遡ります。2011年に長野県が中心となって、福島の子どもたちのキャンプの受け入れを全県的に実施をしました。そのキャンプの実施場所の一つとして阿智村が名乗りを上げまして、伊達市の小学生160人を迎えてキャンプを実施しました。

村としての取組はこの1回で終わっているんですが、このときにかかわったボランティアの皆さんたちが、その後も福島への支援をしたりしていました。その中でもう一度キャンプをやりたいということで、2013年の6月に、公民館にそういったことができないだろうかということをお話をいただきました。阿智村の公民館では、こうした何かやりたいというお話が住民の方からあったときには、できる限り一緒にやっていくというのを大事にしています。そうした中で、このときも一緒に、ではキャンプができるようにやりましょうということで始めました。その後、キャンプの実行委員の母体となる「福島に学びつながる会」というのがこのとき発足を果たして、キャンプ実施へ向けた準備を始めました。1年後の2014年8月に第1回のキャンプを実施しまして、昨年には第

2回のキャンプを実施してきています。

これからこうしたキャンプがなぜこういうことをやるようになったのか、やってみてどうだったかというところを、これから金子さんのほうにお話をいただきます。

【金子智行氏】

こんばんは。このキャンプの代表をしております金子といいます。よろしくお願ひします。

少し私の自己紹介をさせてください。私、実は阿智村に来て5年目です。Iターンです。ですが、実は学生時代、長野大学に在学していました。なので、上田市で4年間、長野県で過ごしていました。というところで、いつか長野県に戻ってまた暮らしたいなという思いがずっとありまして、いろいろな思いがあったんですが、30代半ばのころ移住を決意しまして、いろいろなところを見たんですけども、阿智村に来て、星もすごくきれいだったんですけども、阿智村、特に私が今住んでいる伍和地区の景観があまりにもすばらしくて、ぜひここに住みたいと思い、阿智村に来ました。私は長野県に来たら農業がしたいと思ってまして、長野県の里親研修制度を活用させていただいて、2年間研修して、今、私は就農、3年目に入りました。

という私が福島への支援にかかわることになったきっかけというのは、農業を教えてもらった里親の市川さんという方がいらっしゃるんですが、その方が支援米プロジェクトという被災地支援の活動を始められました。それに合流する形で、最初始まりました。

この支援米プロジェクトというのは、被災地に向けて、東日本大震災の被災地に向けて、みんなでお米をつくって、そのお米を送ろうという取組と福島県の支援というところで、ひまわりの種をみんなで作って、ひまわりの種を送ろうと。向こうでひまわりの種を集めていらっしゃる福祉作業所のグループがありまして、そちらに向けてひまわりの種を送ろうと。あと、その施設で作っているバッチであったり、いろいろなものを販売して支援しようというところで始まりました。

ひまわりの種をつくるところで、小学校のみんなにもちょっと協力してもらって活動したんですけども、最初に私が行って、子どもたちの前で福島を支援する意味であったり、被災地を支援する意味であったり、困っている人を支援する意味であったり、あと、ひまわりの種をつくって送る意味であったりという話をさせていただきました。あと、直接行って福島の様子を見てきているときだったので、その福島の今の現状であったり、このときは2012年、2013年でしたか、の様子を子どもたちに少し説明させてもらって、どういう意味でひまわりの種を育てるのかということもお話させていただきました。

その被災地支援米プロジェクトを通じて、私も何度か直接、福島県へ訪問しまして、直接、向こうの人と話して、直接、その被災地の様子を見てきたんですけども、もう2年、3年たった状態で報道のほうもかなり落ちついてきている状態だったんですが、直接行くと、本当に福島の人たちは心の底から苦しんでいると、希望も見出せないでい

るというのがすごくよくわかって、このままではいけないと。絶対に忘れてはいけないという思いから、自分たちにできることは何だろうというふうに思ったところ、福島の子どもたちを何とか支援したいなと。

一番困っているのは弱者である子どもたちであったり、障がい者であったんですけれども、その中でも子どもたちを何とか支援したいと思った中で、阿智村では2011年キャンプを取り組んでおられたので、それを何とか復活させたいという思いから、公民館さんと一緒に福島に学びつながる会というのを発足して、そのキャンプを開くための会をつくりました。2013年だったんですけれども、それで実際に福島の方を呼んで講演会をしていただいたり、実際にそういう、保養キャンプというんですけれども、そういうキャンプに取り組んでいる方にお話を聞いたり、勉強してきました。

その準備をする中で、「福島つながるチャリティフェス」と言うのを開催しました。これは阿智村民、村外の方もいたんですが、その方に音楽の発表をしていただいて、人に集まってもらって、そういう福島の状態を知ってもらったり、キャンプを開く資金集めの一環にしたりというために開きました。それに伴ってといいますか、一緒に支援米プロジェクトでつながりのできた南相馬の方々に来てもらって、直接ここで、この場所でお話をしてもらいました。

1年目、2014年は、缶バッチをさっき売っていたんですけれども、それをつくっていらっしゃるえんどう豆、南相馬ファクトリーというグループの代表は、2015年は南相馬市の職員で、その震災当時に防災担当、特に消防団の取りまとめ等をされていた方ですけれども、そのお話を村民のみんなで聞くことができました。特にお話の中で、震災のとき一番感じたのは、一番大きな大災害のときに一番大事なものは、先ほど知事からもお話がありましたが、地域のつながりであり助け合いだったというお話があり、とても印象に残っています。

このキャンプ、財源なんですけれども、基本的には募金といいますか、皆様のご協力で資金を集めまして、福島の子どもたちがなるべく参加しやすいように資金、その参加費はなるべく抑えて呼べるようにということで活動しています。なので、各地、募金活動をして、昼神温泉というところの朝市で、要は写真のような形で募金活動をしています。このゴールデンウィークも毎日やっていました。また各種イベントに出向いて、募金活動をしたりしていました。

今年、3年目のキャンプを開くんですが、それに当たって、昨年、伊達市のほうを訪問したときに、ぜひこの事業を続けてもらいたいというところで、ちょっと予算のほうでも少し協力したいというお話もいただいております。また阿智村のほうからも少しご協力いただけるということで、村長、ありがとうございます。そういう方向で話をしております。

2015年キャンプ、どのような形でしたかというプログラムなんですけれども、まずこのキャンプを開く目的といいますか、意味といいますか、まず第一に、当然、福島

子どもたち、福島は普通の町中の、いわゆる空間線量といわれるものはもう通常のレベルに落ちている、これは間違いないんですけども、ただ一步、山に入ったり川に行ったり、例えば側溝に行ったりすると、やはりちょっと危険な状況がまだいまだに続いているし、多分、山に関しては今後もずっと続くだろうといわれています。という状況の中で、子どもたちは自然の中で遊ぶことができません。なので、その自然の中の活動をぜひ阿智村に来てやってもらいたいということが最大の目的であります。それがまず1点。

あと、やっぱり先ほども言いましたが、福島のことを忘れてはいけないということも多くの人に伝えたいというのがありまして、プログラムでも、阿智村の中の各地区回れるように意識してつくっております。それで多くの人にかかわってもらって、ちょっと考えるきっかけになってもらえたらなというふうに思っております。

もう1点、支援すること、そのことについて考えることで、大災害が仮に起こった場合、どのようにしたらいいのかという意識を少し感じてもらえるかなということも、一応、目的の一つとしております。

参加者の感想なんですけど、1年目をやったとき、2年目はできるかなとすごく不安だったんですけども、最初に参加してくれた子どもたち、その保護者たち、また参加してくれたスタッフの感想を聞いて2年目をやろうと決めました。ここに幾つか出ているんですけども、「福島ではあまり体験できない川遊びをすることができて楽しかった」と。中学生が参加しているんですけども、中学生の言葉をいただきました。また、その保護者からは、「この体験を通じ、子どもたちが日本中に福島のことを応援してくれる人たちがたくさんいると感じ、胸を張って生きていける、自信につながると信じています」というお言葉をいただきました。また、その参加してくれたスタッフからは「遠い福島のことを自分のこととして意識し続けるには人とのつながりをつくることが一番だということに、キャンプにかかわることで改めて気づかされました」というところで、このキャンプをやる意味はこの感想の中に全て含まれているなと僕たちは思っていて、今後も続けていきたいなと、これを読むたびに思います。

昨年、2015年の12月なんですけれども、今まで支援米プロジェクトとして福島県を何度か訪問してきました。それを今回、このキャンプのスタディツアーということで、ちょっと趣旨を変えて行いました。これは震災から5年たっているわけなんですけれども、今でも福島を支援するその意味をやっぱりスタッフたちに直接感じてもらいたいなということで、なるべく、今までは物資を運ぶのが目的だったんですけども、今回は人を運ぶことを意識して、なるべく多くの人に直接、福島のほうに触れてもらおうと。今、どういう状況なのか目で見て、向こうの人と直接話をして感じてもらいたいなと思って実施しました。人がそんなに集まるかなとは思ったんですけども、最初は、多くの人が手を挙げてくれて、12名で福島のほうに訪問することができました。

その際に伊達市役所のほうにも寄らせていただきまして、市長さんであったり、多く

の方と懇談する機会もつくっていただいて、大変ありがたいことだと、また今後も続けてほしいというお話をいただいております。

最後になりましたが、今年も8月4日から8日でこのキャンプを開催したいと準備しております。今、現状、伊達市の中学校のほうにチラシを送ってしまして、今、参加者を募集しているところです。伊達の教育委員会さんのほうで取りまとめていただいて、参加者を集めていただいているという状況であります。

この写真、全員そろった去年の写真なんですけれども、またこのような、みんな笑顔な写真を今年も撮りたいなと思っていますので、いろいろなところで募金活動であったり、あとボランティアの参加も呼びかけていきたいなと思っていますので、もし気になった方は手を挙げていただきたいなと思っています。

私からは以上です。ありがとうございます。

【木下巨一氏】

ありがとうございました。ちょっとてんこ盛りの3つの事例でしたので、なかなか時間のほうも押してしまつてすみませんでした。

ちょっとここで知事に少しお話をさせていただきたいと思っていますけれども、打ち合わせをしたわけではなかったんですけれども、最初の知事のいただいたご発言で、最初は手話通訳の方のお話の中で、やっぱりコミュニケーションというのが大事だというお話をいただいて、それは一つ、つながりということでもあるんですけれども、そんなことが今日の3つの事例の中で共通しているのかなと思ったのと、やっぱり長野県は地域力があるぞという話、それから、やっぱり学習県、それぞれ取組の中でかかわっている人たちが大変学んでいるというところが特徴だったかなと思ったんですけれども。

ちょっと先にあまり言ってもいけないんですけれども、そういう意味では、知事の最初の発言がちゃんとつながった事例になったかなと思いました。

すみません、ちょっと、ここで一言、お願いします。

【長野県知事 阿部守一】

最初に、私、話し過ぎたので、今、3チームの発表、それぞれ大変すばらしい取組をありがとうございました。

これは、まず最初のお話は自治の根幹で、地域を知るということは自治の根幹だと思いますし、2番目の話は、創業しやすい県にしようとしているんですよね、長野県、知っていますか、日本一創業しやすい県づくりと言っているんですけども。

そうそう創業しやすい県と打って、今、僕はやってみただけけれども、創業しやすい県でグーグルで検索すると、長野県の取組が一番最初に出てくるので、ぜひよろしくお願いします。

ちょっと創業、まちづくりの話だとか、あと被災地支援の話があって、これちょっと

個別の話にコメントし出すと切りがなくなってしまうので、逆にファシリテーターに質問してしまっていけないんですけども、ミスター公民館の、3チームの話聞いて、私は公民館とは一体何だということが実はよくわからない、何でもありじゃないですか。

それ、ちょっと木下さんから見るとどういう、公民館って一体何というのはどう考えればいいのか、ちょっと教えてもらえないですか。

【木下巨一氏】

台本がないので、こういうことはあまり予定してしなかったんですけども。

今日の3つの話を実はお願いするところでも、1番はやっぱりとても魅力的な方たちがそろったかなと思ったんですけども、やっぱり地域の住民の方が主役になって、そこで本当に楽しく活動されているという、そういう様子を見ていただきたいというのがありました。

やっぱりこれ最初に、先ほども知事おっしゃられたんですが、自治の根幹という話がありましたけれども、やっぱり地方自治の根幹は住民自治かなと私は思っておるんですけども、その自治の担い手というものが公民館の活動の中でだんだんつくられていく、そんな場所かなと思います。

ですので、どんな活動をするところが公民館かというのは実はあまり考えていなくて、どういう人たちが公民館の活動の中で力をつけていくかなという、そのところが大事かなと思って、公民館の活動を考えております。すみません。

【長野県知事 阿部守一】

ちょっと何か、私一人で話してもつまらないのでちょっといいですか、少し対話させてください。

僕はちょっと勉強不足で申しわけない。公民館という公民って、公民館ってどういう意味で公民館って言っているんですか。いきなり質問してしまつてごめんなさい。

【木下巨一氏】

何か難しい。

【長野県知事 阿部守一】

学校の勉強で何か公民と。公民って、何となく難しいイメージが人によってはあるような気がするんですよ。

【木下巨一氏】

戦後草創期に生まれた言葉なので、多分、少し難しい意味もあったかなと思いますし、

多分、その言葉は戦前も使われていたのかなとは思いますが。

ちょっと私が最近、こういう捉え方がいいなと思っている使い方としたら、やっぱり公益的な活動にかかわる住民ということでどうかと、ただ、それが始まったときの考え方とはちょっと違うと思いますけれども。

【長野県知事 阿部守一】

なるほど。何か、あまり私がこんなことを言っははいけないけど、そろそろ公民館という名称って、何か新しく考えたほうがいい時代のような気もするんですけど、どうなんでしょうかね。私がこんな問題提起してはいけないかもしれないけれども。公民館って、やっぱり公民館がいいのかな。

【木下巨一氏】

いろいろな名前に変わってきてはいるんです。愛知県の豊田市だと生涯学習センターというふうに、生涯学習交流館ですね。そういう言葉に変わっていたところもあるんですけども。

ただ、やっぱり始まったときからの思いをバトンタッチしてやっぱりかかわってきているたちは、この公民という言葉にすごいこだわりを持っています。

【長野県知事 阿部守一】

そうなんですよね。あまりこういうのを勝手に直せとかというと大変な問題になってしまうから、この程度にしておきますけれども。

何か、これ素朴な疑問として、木下さん、最初、冒頭も地域づくりの拠点だとおっしゃっていただいて、なるほどなと思ったし、自治の担い手をつくるどころ、活動するところという、そういう形でやる目的よりは、むしろ活動の性質で場を捉えるというのは、なるほどそうなんだなというふうに私は思いました。

そこでどんな活動を花開かせるかというのは、今日の皆さんが発表していただいたようにバラエティに富んで、それが地域の発想だし、地域の自治で私は大変いいことなんだろうなというふうにも思います。

ちょっとあまり私が話してはいけないので、またファシリテーターに進行をお返ししますので、よろしく願いいたします。

5 意見交換

【木下巨一氏】

ずっとしゃべっててもらおうと、気楽でいようと思ったら、すみません。

ちょっと一言だけつけ加えさせてもらおうと、今日は住民の方だけでなく職員にも出

てきてもらったのは、やっぱりそういう頑張って住民の方たちが主役で活動しているちょっと裏方に、実は結構公民館の職員が頑張っているんですという、公民館の職員はこういう活動にかかわることで自分が一番勉強しているというのが実はありまして、地方自治体の職員としてのすごいトレーニングをしているということでも実はあります。

そうしたら、知事に一回返していただいたので、せっかく大勢の方が今日はフロアに来ていただいておりますし、この場所のつくり方を見ていただくと、要は対面ではないです。皆さんも同じ車座の発言ができるようなしつらいにしてありますので、ぜひ今日の話聞いていただいて私はこう思うとか、ご自分の公民館にかかわるちょっと思いとか、それからどうでしょう、今日のテーマはやはり若い人たちを育てていくというようなこと、それを大人たちが学びながら育てていくというような、そんな話をたくさん出していただいたので、どなたでも結構です。ご発言を。それで、所属とお名前はお聞きしたほうがいいですけども、はい、それではお願いします。

【男性A】

長野県に来て8年、いまだに鳥取県半年、半分ということで、長野・鳥取、2地域を居住しております。鳥取県は全国で最初に手話条例をつくりました。頑張っております。

実は午前中に、知事の言われた教育県を担うべくシニア大学の講師をしまいで、今日のテーマは若い人ばかりなんですけれども、実はシニアの皆さんこそ公民館の主役ではなかろうかというぐあいだに思っておるところです。

それで実は、なぜ長野に8年もいるかということなんですけれども、実は67歳にしまして、先月、同志社大学より博士号をいただきました。そのテーマは社会教育が果たす役割に関する研究ということで、今日ずばり地域活性化における社会教育が果たす役割ということを8年も研究しております。

シニア世代、それは建前で、実は楽しく飯田で友だちがたくさんできまして飲み歩いていると、ここにお集まりの方々、木下さんを初めとして数々の方々と一緒にしながら実は研究を続けて、研究という建前の生活しております。大変住みやすい場所で、私もできるだけこちらに移住したいとは思っておりますけれども、なかなか事情があるので半年おります。それで、私自身が今日、大変勉強になりました。知事が言っておられる、午前中は教えておりますけれども、午後はこうやって勉強させてもらっているということでございます。

私、2点だけお話をさせていただきたいと思います。タウンミーティングということですから、フロアからということです。

今日の3つの発表、いずれもすばらしい発表でございまして、私が研究テーマにした「竜丘公民館」とかは出てきませんでしたけれども、非常にそれぞれすばらしいことでございます。ただ、少し、今、知事からもありましたように、公民館という名前はどう

なんだろうかと。これ、今、全国でそういうことが言われております。私が考えておりますのは、公民館という制度やシステムというもの、これはとても素晴らしいものなんですけれども、その根底となっている住民の学び、やっぱりこれに注目すべきではなからうかというぐあいに思っておるところです。それが私の論文の基礎でございます。

今日のテーマは、公民館を活かした多様な学びということですが、公民館以外のもも活かした多様な学び、それは住民の皆さんの根底の学びというのがあって初めて成り立つんじゃないだろうかとというぐあいに思っています。

それからもう一つは、ちょっと偉そうに政策学的実践ということをおっしゃるけれども、実は県政全般に対して、こういう住民の学びというものは公民館というシステム以外でも使えないだろうかと、このことが重要ではなからうかというのが私の意見でございます。県政全体の政策に反映するような、そういう新しいシステムを住民の学びの中からつくっていかれるということが非常に、私はいいことではなからうかというぐあいに思っています。それが一つです。

それからもう一つは、社会教育と学校教育、あるいは社会教育という公民館の中で、小学生の皆さんや高校生の皆さんと交流をしたりして相互に、教育にも大きな影響があるし、学校教育にもあるし、それから公民館の側にもあるということで大変素晴らしいことだというぐあいに思っております。

ただ、午前中、私は何を講義してきたかという、シニアの皆さんこそ社会教育が重要、知事と全く同意見で、実は鳥取県の奇跡というのがございまして、鳥取地震があったときも一人も死者がないということでございまして、同じことだと思います。そうすると、公民館というものの価値があった時代、時代という木下さんに悪いですが、高等教育がやはりこれほど普及していなかった時代というのは、やっぱりこの地域の皆さんは高等教育を受けるために公民館に行かれて、非常に頑張られた。名前も天竜大学ですとか信濃生産大学とか、そういうことで非常に、私、今、シニア大学の講師をさせてもらっていますけれども、そういうことがございます。

それで高等教育というものが普及したために、ある種、公民館に行かなくても高等教育の中でいろいろなことが得られたということになっていると。そうすると、もう一度、シニア大学、では何かというと、やはり高等教育を残念ながら時期的に受けられなかった方々が、今、たくさんシニア大学に来られています。自分は大学を出ていないので、シニア大学を出て大学卒になるんだというような意気込みの方々ばかりです。そうすると、そういうことに対して公民館が何ができるのか。シニア大学は、残念ながら年間100人、その程度です。公民館は全ての住民の方々を対象にされていますから、非常に幅広い形で学習ができるということだと思います。

ですから、今日のお話、非常に素晴らしいし、非常にそれらのテーマは進化されていて私も勉強させていただきましたけれども、やはり公教育との結びつきというところに、あまり木下さん、理論というのがあるものですから、もう少し広く、例えばシニアに対

してどういったことが可能なのか、というようなことがテーマになるのではないかと考えております。

いずれにしても、半分住んでいます鳥取県ではこんな話は全くできなくて、また私が難しいことを言っておるということなんですけれども。本当にこの地域に来ますと、こういう話が本当に住民の皆さんと一緒にできるという、とても楽しいシニア、老後を過ごさせていただいておまして、それからこうやって知事さんと何かやってできるというのはなかなかいい催しで、ただ1点、ちょっと時間ももう少し、夜だともっとたくさんの方の住民の方が来られるんですけれども、ちょっとそこは残念だということで。

いずれにしてもすばらしい取り組みですし、私が8年間研究してまいりましたことの本質が全て木下さんの中にしていますし、知事さんもおそらくそれを受けて、これから長野県の県政にそれ役立っていかれると思うので、大変期待を申し上げますし、住みたい県一番ですか、今、一番ですよ、もうみんな来たがっていて、私が長野へ行くと言ったら「いいですね」と、いいですねを満喫しております。

お練祭りから御柱、全部見て楽しんでおりますので、そんなことで、2つのことを問題提起させていただきました。どうもありがとうございました。

【木下巨一氏】

ありがとうございました。一つ一つにお答えしていくとなかなか時間が厳しいと思うので、最初に皆さんのほうからどんどん話をいただけますか。お願いします。

【男性B】

阿智村の前公民館長をやらせていただきました者です。

先ほどお話がありましたとおり、寺子屋構想に始まって、その戦後の荒廃の中で、やっぱり地域の自治の根幹である部落会、今はいろいろ変わっておりますが、そういうコミュニティがこの公の意味であろうと思われるんですね。

先ほど知事さんがおっしゃった神城断層の被災地域、栄村の公民館、被災されてから住民がもう一度集まって、また公民館を再開していると。だから、いろいろな学びの場とか、学びの方向とか、いろいろあるんですけれども、根幹は昔の部落会で住民が自分たちの生活に基づいた意見交換を行ってやってきたから、それが公民館活動の原点であろうと。いろいろな考え方はあると思いますけれども、私はそういうふうに思いますけれども、その点も、県知事さんもおわかりいただけたらありがたいかと思えます。

公民館、長野県広いものですから、ここだけの公民館活動が決して県の公民館活動の、何というか、流れであるとは私はちょっと考えられないんですけれども、すみません。

【木下巨一氏】

ありがとうございました。そうなんです。知事、今日は私、3つの事例をお願いした

のは、実は飯田の公民館の中でも本当に地区が違つと、公民館の成り立ちが全然違つと
いうのがありまして、いろいろな公民館スタイルがあるんだというのをちょっと、体感
してもらうにはたくさんの発表があつたほうがいいかなと思ひました。

それでは、ほかにご発言いただける方はいらつしゃいますでしょうか。ちょっと熊谷
村長、さつき予告しておいたのでお願いできますか。熊谷村長も公民館活動をなさつて
いるわけですから、すみません。

【阿智村長 熊谷秀樹氏】

公民館は生きがいを持って人を育てる場かなと思ひます。先ほども長姫高校O I D E
の皆さんが発表した、当時リヤカー行商をされたんですが、実はそのときにお手伝いを
させていただいたんですが。

商業高校だったので、そういう商売の仕組みを皆さんがわかればいいかなという軽い
気持ちで商店街と連携してやつたんですが、実はこれが当たりまして、買い物困難者と
いう、そういった社会的な問題の中を、こういった生徒たちが一緒に行つてそこで販売
をしますと、本当にお年寄りの皆さんが、高校生が来てくれたと喜んで本当に大賑わい
になりました。

ですので、先ほども鎌倉君が発表して、本当に高校生らしからぬプレゼンテーション
力だつたものですから、そういったことを学べる場というのがこういった地域、そうい
った浅井先生がすごくそういうことを組んでいただいて、こういったことを地域の方と
皆さんと連携してできる。そして公民館というのは、さつきも言つたように、子どもか
らお年寄りまで学べる場だと。そして自分の人生を一層高められる場なのかなという、
そんなふうに通つたものですから、そんなことを思ひながら普段おります。以上でござ
います。

【木下巨一氏】

ありがとうございました。阿智の公民館つて本当に元気な公民館で、特に行政が設置
した公民館ではなくて、地域の自治公民館、先ほど知事が1,000数百の公民館がある
というお話を、ちゃんとそらでお話されたのでびつくりしたんですけれども、いわゆる自
治公民館まで入れると4,000以上、長野県には実はあります。

ほかはどうでしょうか、ご発言いただける方がいらつしゃいましたらぜひお願いしま
す。何でも結構です。どうですか、いいですか。

そうしたら、時間のこともありますので、ちょっと知事にもう一回話をさせていただく
前に今日の話、それぞれのグループで発表いただいた皆さんからもう一回、一言ずつ
ちょっといただいておいて、知事にお返しさせてもらいたいと思ひんですが。

それでは発表の順番で、もう一回、伊賀良の皆さんからお願いします。

【平田睦美氏】

知事さんが若々しいので、直接拝見しますと。本当、いつでもシニア大学にもごあいさつに出てくださいるし、ありがとうございます。

そんなことを言いながら、私は今日の校歌を内容にした発表でございますが、今日たまたま小学校へ電話しましたら、実は館長さん、先日の13日に校歌にある「笠松山」に登ろうということで、6年生、5クラスあるんですが、全員の方が笠松山に登ったら全景が見えて、そこに小学校あり、アップルロードありということで、初めて学校でそういうことができたということで、本当に喜びの声をいただきました。

やっぱりふるさとというところのこの記憶の中に、やっぱり人生をやっていくと、いろいろ、折れるときとかいろいろありますが、心の太い根っこのところにこの地元で生活した子ども時代なりを植えつけておくと、ずっと人生を支えてくれるような力があるということで、うれしい、今日はことでございました。ありがとうございました。

【北林省治氏】

今回、この「伊賀良を学ぼう」という活動をきっかけに、広報部としてなんですけれども、ほとんどの伊賀良の人たちは、この伊賀良というところをよく知らないということがまたわかりました。ですので、できるだけ今後は、その広報を通じて伊賀良を知ってもらおうということにちょっと力を入れていきたいなということで、もっと地元を好きになるということ、これは一番大事なことではないかなと思いますので、そこら辺に力を入れてやっていきたいと思います。

【大石真紀子氏】

この2つの発表をお聞きして思ったのは、やっぱり住民の皆さんが本当にやりたいと思っていることをやるとか、そういう中で自由に話し合っていて育て地域をつくっていくというのが、公民館のすごく重要なところだなというふうに思いました。

そうした活動を支えるのに必要なのは、やっぱり自由に何でもできる、自由に話せるという、そういう自由が大事なのではないかなというふうに思いました。

そういったところを職員として住民の人たちがやりたいように、そういう自由を保障していくということがすごく大事なのではないかなというふうに感じました。以上です。

【小島一人氏】

私、愛知県出身なものですから、公民館というと何というんだらう、集会所といいますが、ただの箱物というイメージしかなかったんですけども、こちら阿智村に来て、住民が積極的に学んでいる場ということで、正直、驚いています。

また自分の活動のことで言いますと、公民館と一緒にこのような活動に取り組むこと

ができたことで、本当に、私、Iターンなんですけれども、もともといる住民の皆さんとか、その住民同士の中でも多くのつながりができて、かかわりをつくるのがこの事業でできて、その人たちと学びを共有することができたなと思っております。以上です。

【鎌倉朋也氏】

最後なんで、ちょっと言いたいことがあるんですけど。こういう、ここで僕、高校生一人だけですよ。こういう、何というんだろう、いろいろ地域のことだったり、活動しているのが飯田O I D E長姫高校だけじゃなくて、ほかの高校も結構、最近、そういう、地域に出てイベントをしたりするという活動が始まってきているので、こういう、この県政タウンミーティングの高校生版を、ぜひ飯田・下伊那の高校生を集めてやっていただけたら。長姫高校、下伊那農業高校、飯田高校、風越高校、阿智高校、阿南高校と、すごい各高校でそういう熱い思いを持っていたり、いろいろな活動をしている人もいますので、いや、これ集めたらおもしろそうだなと思うので、今年やってください。

【浅井勝巳氏】

地域に生徒が出て行くとあちこちでいろいろなことをお願いして、ああ、今、そうやって言うと、きっとまたちょっと何かの手伝いを多分、学校がしなくてはいけないんだなと思って、いつもこんな形で、いろいろなところで生徒がいろいろな話を持ってきて、私たちは後から聞いて、いや、これ今度ここ行くんです、これやるんですと言われたときに、いや困ったなと言っているうちの職員がみんな笑っているんですよ。いや休みの日、いや、今週もまた休みないねと言いながら、こういう活動というのは非公式の活動の部分もあるので、なかなか部活でもないですし、なかなか難しい部分はあるんですけども、やっぱり、私たちは生徒たちが育っていく姿を見るのが一番楽しい部分もありますけれども、そんなきれいごとで言っていられないときもありますけれども、ぜひ私たちがどんなことでもやりたいと思います。

最後に、私たちこの地域人教育というのをやっていて、一応狙っているのは、そうはいっても学校の部分もあるので、これをやると絶対勉強ができるようになるという、ちょっと確信はないんだけど、今、仮説を立てて、こういうことをやることで自分で考えて行動できて、それが何で学ばなければいけないんだというところまで持っていきたいと、それが地域人教育の最終的な目的です。

よく外に出てイベントをやって遊んでいるだけだという批判を受けることも多々あるんですけども、最終的にはそこまで考えて、今、一生懸命研究をしているところです。ありがとうございました。

【金子智行氏】

この後に話すというのは。さっきフロアから阿智の前館長さんがおっしゃられたことで、その公民館活動の根幹とか原点は部落単位の、ずっと生活の中で話し合われてきた、そういう地道なものがあって、その上に今も成り立っているという話が、ああ深い話だなと思って僕は聞かせていただいておったんですけれども。それは昔の話ではなくて、今も普通に仕事をしていらっしゃる方が夜な夜な集まって、そういうことをやられておられて、金子さんも北林さんもそうですし、フロアの方も多分、そうかなと思っていて、そういうときに、こういうセンセーショナルなやつが出てきたもするんですけれども。

ほとんどのものは、もしかしたら地味な活動であったりとか見えない思いであったり、小さいものかもしれない、何かそういうところにこそ大事にしなければいけないものがあるのかなと思っていて、それを例えば効率化みたいなところとか、そういうところでつぶしていってしまうような流れというのはよくないなと、こういう仕事に携わるようになって感じるようになりました。

なので、もう少し、地域の人たちの声を聞きながら仕事をしていくということを大事にしていきたいなと、そんなふうに感じました。

【木下巨一氏】

ありがとうございました。予定の時間になったんですけれども、まだ知事がきつといっぱい話したいと思いますので、ちょっともう一回、預けます。お願いします。

6 知事総括

【長野県知事 阿部守一】

どうも皆さん、今日はありがとうございました。いっぱい話したいので、いっぱい話すともう時間がオーバーし過ぎてしまってあれですから、簡単になるべくしたいと思いますけれども。

ちょっと皆さんからいろいろなお話が出て、ちょっと私の頭の中も整理できないですけれども。私は、金子さんのさっきおっしゃった、長野県以外から見れば公民館なんてただの箱だよという、私の感覚も実はそっちに近いんですね。さっきもお話あった、とはいえ、長野県全体がこの飯田・下伊那と同じじゃないよというのも、全く私もそうだと思います。

これはやっぱりこの地域の公民館の活動の、何というか、すばらしさ、活動のエッセンス、やっぱりもっと県内にも広く伝えていかなければいけないなということを改めて今日感じていますし、長野県だけではなくて、男性Aさんでしたか、鳥取と往復していただいて、まあこの公民館文化と言っているのかどうか、公民館文化をやっぱりもう一回、日本全体で見直していこう運動をやったらいいんじゃないのというのが、私が今日

皆さんと対話をさせていただいて、一番強く感じたことですね。

ちょっと話がずれてしまうかもしれないんですけども、私、冒頭、長野県の強さ、地域力だと言いました。私は、これからの日本の社会がどうあるべきかと考えたときに、もう一回、やっぱり日本全体が地域の力を強めなければいけないなというのを痛切に感じています。私はずっと地方自治の仕事に携わっていましたから、何というか、地方自治、重要だよねということは常に感じて仕事をしてきましたし、とはいえ、いつまでたっても、本当の意味での分権型社会に対するもどかしさというのをずっと感じています。

この地方自治というのは、国と都道府県とか市町村との関係の行政間の自治分権の話はもちろん重要だと思えますけれども、やっぱりそれ以上に、住民の力を基本にして地域をつくっていくんだというこの動きこそが、私は人口減少社会における日本のモデルとして輝くことができる方向性ではないかなというふうに、今日、短時間でですけども、皆さんとお話して強く感じました。

さっき大石さんも自由が大事だという話がありましたけれども、何というか、分権型社会でない中央集権型社会というのは自由がないんですよ。今日、さっき私、いろいろなところを回ってきましたけれども、例えば福祉行政なんて私は最たるものだと思いますけれども、いろいろな基準があって、もちろん入居者の安心・安全とか、サービスを受ける人たちのことを考えれば、一定の基準は私は必要なんだと思います。ただ、今の日本の基準はあまりにも過剰だなというふうに思います。それは現場の実態を知らない霞が関の皆さんが、何というか、机の上だけでルールをつくっているからそういう話になっている。でも、そういうことをやっぱり変えていかなければいけないと思います。変えていく力は、これ行政の都道府県とか市町村が頑張るということではなくて、本来は一人一人の国民、住民、市民がもっと声を挙げていかなければいけない。その声を挙げていく基盤としての公民館というのを、私は実はもっと生かしていかなければいけないなということを今日痛切に感じました。

ぜひちょっとそういう観点で、今日は木下さんにコーディネーター、ファシリテーターをやってもらって、あまり発言機会が少なかったですけども、ちょっともう一回じっくり、私と公民館とは何かというのは対話させていただいて、ぜひちょっと、さっき言ったように、長野県からその自治を変えていこうと、その基本が公民館だというような位置づけの取組をぜひやりたいと思いますけれども、どうですか。

【木下巨一氏】

お願いします。

【長野県知事 阿部守一】

ちょっと高橋課長にも要は一緒に加わってもらって、ぜひそういうことをやっていき

たいと思います。

それから、ちょっと今日は3チームの皆さんの活動にちょっと、いろいろな分野なのでそれぞれコメントすると、もう無限に時間がかかってしまいそうなので最初はあまりコメントしなかったんですが、ちょっとずつ少しお話をさせていただきたいと思いますけれども。

最初の伊賀良公民館の活動、これは平田さんと北林さんのやっぱり、僕は校歌を題材にしているというのはすごくいいなと実は思って伺っていました。やっぱり何か地域の中でどんどん変わっていかねければいけないものもあるけれども、やっぱりずっと同じで引き継がれているからこそ価値があるものがあって、そこに着目して、その一つはやっぱり学校の校歌というのはすごく重要なだろうと私は思っています。

ちょっと話、違いますけれども、今日は三遠南信自動車道の青崩峠のトンネルを見してきました。普通、この青崩というのやっぱりなかなか地域の特性をあらわした地名だと思います。今でも難工事区間で、それは読んで字のごとしの崩れやすい峠だということで、やっぱりその地域、今、私はやっぱりどんどん地域で新しい地名に変えてしまったりしていますけれども、やっぱりその地名であったり校歌であったり、そうしたもののというのはやっぱり先人たちが知恵として残してくれているものがたくさんあるので、やっぱりそういうものをもう一回読み解いて、次の世代にしっかりと伝えていくということがとても重要だなというふうに思ってお話を伺っていました。大変、ありがとうございました。

それから、鎌倉君のところの話はぜひ創業してね、起業してね。僕は提案はちゃんと受けるから、高校生タウンミーティングやろうぜと言われたのでやります。今日も、何でしたか、トンネル工事現場でO I D E長姫高校のみんなと一緒に僕も勉強してきたので、トンネルはこうやってつくっているんだよといって、現場で一緒だったので。

ちょっとこれからの長野県を背負って立つ若い人たちが、ぜひちょっと、何を考えているのか私も知りたいし、私の考えももっと知ってもらって、ぜひ一緒になって長野県をよくしてもらいたいと思いますので、ぜひお願いします。さっき言ったように、長野県、創業支援の取組、いっぱいやっているの、融資もするし、相談にも乗るし、何でもやりますので、ぜひ起業するときは言ってください。

それから僕はやっぱり、これ鎌倉君が目立っているけれども、私は偉いのは浅井先生だと思っていて、普通の先生、そこまでやらないよね。

【浅井勝巳氏】

最近はみんなやっています。

【長野県知事 阿部守一】

いや、それは偉いなと思って。ぜひ、僕はちょっと学校って、いろいろ人口が減る中

で、小学校も中学校も高校も統廃合の動きがどうしても出ていかざるを得ないだけけれども。学校というのは多分、私は、単にそこに行って勉強を教えて、はい終わりというだけの機能のものではないんだと思います。ないから、統廃合するとみんながそんなことをやめてくれという話になって、でも、だんだんだんだん、何というか、そういうブラスアルファのところが失われてしまっているところが私は課題だと思っている、ただやっぱり地域の拠点で、おそらく、今でもそうなんだろうけど、おそらく昔、教育県だったときは、やっぱりそこで学校の先生が子どもたち、生徒たちはもとより、やっぱり地域の人たちから尊敬され大事にされて、だから長野県、教育県だったと思うので、ぜひもう一回、そういう学校にしていきたいなと思っていますので、浅井先生もぜひ一緒になって、さっき何でもやると言ってくれていたもので、ぜひよろしく願いいたします。

小島さんもぜひ、ちょっとこういう学校との、学校と公民館の連携というのをぜひ、私は素晴らしいモデルだと思いますので、公民館側からもぜひ、学校の取組をぜひサポートしてってもらいたいと思います。

高校だけじゃなくて、私は、小学校、中学校も開かれた学校にしていかなければいけないと思っています。それは学校が学校の先生と生徒だけの空間ではなくて、やっぱり地域の人たちがもっと入り込める。そういう信州型コミュニティスクールを広げたいと思っているので、ぜひ、何か小学校とか中学校と地域をつなぐという上でも、公民館の役割を発揮してってもらえるとありがたいなというふうに思っていましたので、ありがとうございます。

それから福島との連携の話で、金子さんの、ぜひこれからもちょっと福島県としっかりコミットしていただければありがたいと思っています。さっきもちょっと、チラッとお話が出てきましたけれども、東日本大震災の後、これ長野県、唯一だと思いますけれども、東日本大震災復興支援県民本部というのをつくって、これ行政だけで私は福島県のニーズに応えられないと思って、官民一体で支援しようというふうに思いつくったのが、そのさっきの県民本部のスタートです。それはなぜかというと、例えば私が福島県知事と話をして、県としての応援はいくらでもできます。それは、だけど支援物資を何トン送るとか、そういうことを行政はできても、やっぱり心の触れ合いのところは行政だけでは絶対できない。これはやっぱり県民の皆さんの協力なしにはできないということでそういう仕組みをつくったので、そういうこともぜひ理解いただいて、また、これからも福島県としっかりつながっていただきたいなと。

ちなみに今の福島県の内堀知事は長野県出身ですので、そうなんです。長野県出身の福島県知事ですから、我々長野県はしっかりこれからも福島県を応援していかなければいけないと思っていますので、ぜひよろしく願いいたします。

それから大石さんも、さっきの自由の話は極めて重要な話なので、これからもそういう方針は維持して、余計な外圧に負けずに自由な公民館活動を維持してもらいたいなと

いうふうに思います。

ちょっと長く、ちょっと早口になって申しわけないですけども、本当に皆さんのお話から私自身ができることがたくさんあるひとときでありました。ぜひ、ちょっと木下さんとはまたゆっくりお話をさせていただいて、もう一回、ちゃんとしっかりした意味でこの飯田・下伊那、そして長野県が公民館活動において、ほかの追隨を許さない地域にしていきたいとしますので、ぜひご協力いただきたいというふうに思います。

今日は皆さん、長時間おつき合いいただきまして大変ありがとうございました。今後ともよろしく願いいたします。

【木下巨一氏】

今日、いかにしゃべらずに終わるかというのが、私の今日の仕事かと思っております。昨日までは一生懸命やりましたので、今日は皆さんがしっかりしゃべっていただく条件づくりをやらせていただきました。また次ができたようですので、また楽しみにしております。

それでは、これで進行のほうをお返ししたいと思います。

7 閉 会

【広報県民課長 藤森茂晴】

参加者の皆様、長時間にわたってどうもありがとうございました。進行役を務めていただきました木下様、本当にありがとうございました。

それでは、事務局のほうから事務連絡をさせていただきます。限られた時間ということで、なかなか皆さんにご発言していただけなかった方、大勢いらっしゃいますけれども、冒頭、お話ししましたとおり、封筒の中にアンケート用紙がございますので、そちらのほうにご意見などを記入していただきまして、出口のほうに回収ボックスがございますので、そちらのほうに提出していただきますようお願いいたします。

それでは、以上をもちまして県政タウンミーティングを終了いたします。長時間にわたりご協力ありがとうございました。気をつけてお帰りください。